
解呪男と半妖狐

はいねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

解呪男と半妖狐

【Nコード】

N5496Q

【作者名】

はいねこ

【あらすじ】

明治時代初期のお話です。

変化の術を解呪する青年と半妖の狐の物語。

時は明治、文明開化もそこそこに、あやかしと呼ばれた存在はすっかり鳴りを潜めていた。昔はひとたび事件が起これば、その裏で必ず一枚噛んでいるのがあやかしと言われたほどだ。そんな市井の脅威も時の流れには勝つことが出来なかったようだ。今や見る影もない。きつと山奥でひっそりと暮しているに違いない。

ある日茶屋で団子を食べていた青年は、お会計をしながらおなかをぐうと鳴らす少年を見る。背が小さくて帽子を深々とかぶった少年の顔は窺えないが、後ろから束ねた茶色い髪の毛がもれていた。下にはゆつたりとした西洋のズボンをはいている。

青年が団子を頬張ると、途端に少年のお尻のあたりがモゾモゾ動く。さらには帽子までもがピコピコ動く。

大方変化の術を覚えただけの子狐が葉っぱのお金で団子を買いにでも来たのだろう、と思い青年は変化の術を解除しようと少年の手に触れるが何も起こらない。

どうしたことかと青年。な、何ですかと少年。茶屋の主人に渡した銭もどうやら本物。やってしまったと逡巡するも束の間、走り出した少年は遠く小さく見えなくなった。

手を握られた瞬間、はうと小さく声を上げたのは内緒だ。走った「少女」は息を整えながら落ち着こうと路地でしゃがみこむ。

い、いきなり女の子の手を握るなんて……。でもちよつとカッコよかったかも。軍服みたいな恰好だったし、偉い人なのかな。だとしたらもう会えないかなあ……。

顔を上気させ、いろいろ思いを巡らせた少女は、家で待つ母にいい団子を届けるためにひた走った。

一方その頃、実は軍人でも偉くもなかった青年はため息をついていた。それは華奢な少年の手を握った揚句に逃げられたからではなく、なぜ変化が解除されなかったのか分からないからだった。

今までこんなことはなかったのに。

なぜだ……とそろそろ何十回か分からないほどに自問自答する青年は掌を握っては開いてを繰り返す。すると茶屋の主人が一言。

「あの子、また来るよ」

青年は主人を一瞥し一言。

「そうかい、また来るよ」

代金より少し多めに銭を置いて立ち去った。

少女は困っていた。

医院で男性と二人きりになっちゃった。気まずいなあ……。何かしゃべった方がいいよね。な、何をしゃべればいいのかな……。話題なんて茶屋であつたくらいしかないんだけど……。

時は四半刻ほど遡る。団子をいち早く届けようと走った少女だったが、そういえば茶屋の主人に渡すものがあつたのだ。青年に氣を取られてすっかり頭から抜けていた。

ぱたぱたと来た道を戻り、茶屋の近くまで戻った少女。ふと前方に背が高く、軍服？を羽織った青年が見えた。

青年は何と下郎に絡まれていた。

「おいおい服が汚れちゃったじゃないのお。どうしてくれんのこれえ」

まるで寸劇のような言葉を吐いた下郎は、怪しい装飾を施した洋服のポケットに両手を入れて、下から睨みつけ、口元を変な形にしながら、胸倉を掴もうとていた。

器用だなあ。

少女は思った。そして胸倉を掴まれてひるむ青年。直後響く音に野次馬がざわつく。

パーン！

気持ちいい音だなあ……。

少女の感想はざっくりそんな感じ。さて何が起こったのかと野次馬の間から覗きこむと、そこにはうつ伏せに倒れた青年の姿があった。

「だ、大丈夫ですか！？」

「いやなに、少し……おや、あなたは茶屋の」
頬は赤く腫れていた。

青年はで医院の門をたたく。それに応じてドアから中年のおばさんが顔を出す。

「どうも、こんにちは」

健やかな笑顔で、診てもらいたいのだが……と青年は心の中で呟いた。それと同時に少女は言う。

「この人を診てください！」

思いのほか大きい声で、はっきり聞こえた。

おばさんは青年と少女に目配りする。そして一言。

「あんた達も元気だねえ」

少女は赤面しながらもじもじし始めた。同時にズボンがモゾモゾ動く。さらには帽子もピコピコ動いてせわしない。

「おや、あんたもしかして」

喋ったおばさんの口を塞ぐ少女であった。

青年は困っていた。

この狭い医院の部屋で少女と二人きりとは……。というかこの子は女の子だったのか。初めはあんな恰好をしていたから、てつきり男の子だと思っていたなあ。しかしこれはどうしたもんか。いったい何を話せばいいのだ。茶屋でのことか？ 茶屋でのことでもいいのか？ ……よし！

「「あの！」」

両者が同時に驚嘆する。

「こほん、君からどうぞ」

手を差し伸べる。

少女は俯きつつも目だけは青年に向けている。

「ちゃ、茶屋でお団子食べてましたよね……？」

「いかにも」

……。

お、終わったの？ 今で終わりなの？ な、なんで！ あれ、私どうすればいいの！？

あたふたする少女の表情を眺める青年。

俺は団子を食べた、いかにも団子を食べたぞと言わんばかりの青年の顔は凜々しく、少女が落ち着きを取り戻すまでそのままだった。

「落ち着いたかい？」

「は、はひ」

声が裏返る。

「どうやらまだのようだ」

「いえ！ もう落ち着きましたから！」

「そうか、ならいいんだが」

青年は少女の頬に触る。否、つまむ。ふにふにしながら青年は心の中で知リたかったことを考えた。

少年の手を握ったとき、なぜ逃走されたのかの理由が、ではなく。

なぜ、如何なる変化の術をも解説してきた我が身に触れても、もとの狐の姿に戻らないのか。もちろん、なんで狐だと分かったかなんて聞くのは野暮だ。

「どうして狐の姿に戻らないのだ？」

「なんね……わ、わたしはきひゅねらと思うんれすか……？」
もちろん、少女は野暮だった。

青年が少女の頬に触っても、狐の姿に戻らないことを確認すると手を離れた。

非常に柔らかいではないか。なぜなのだ……。ああいやそうではない。何か理由があるはずだ。彼女も知らないのか？ どうなのだ！
青年が少女と目を合わせる。

すると少女の頬がたちまち赤くなっていく。

テレパシーの類で意志疎通はできない。そんなことはいくらあやかしても無理だった。

少女が青年をちら見しながらもじもじしていると、青年はどうなのだ！ と心の中で繰り返す。

青年の顔をちら見する。しかしこちらを凝視しながら動かない。少女は顔が赤くなるのを自覚するが、ちら見をやめられない。

この人やつぱりカッコいいなあ。侍でもないみたいだし、なにしてる人なのかな……。聞いてみようかな？ ……よし！

「聞きたいことが」

この二人にはテレパシーが使えたようだった。

ガタン。

襖の開く音がして医院で働いているおばさんが入ってきた。

「怪我はどうだい？ そろそろ腫れも引いただろう」
ん？ と言いながら青年の顔を確認する。

塗り薬が効いたのか、どうやら腫れはおさまったようだ。時間に

して半刻。

実に半刻の間、この部屋で問答をしていた。にしては会話の量が多めに少ない。もちろん会話以外の時間は頬を触っている時間と、心の中で色々なことを思っている時間で埋まる。

「ええ、どうもありがとうございました。おかげさまで大事に至らずに済みました」

青年は丁寧にお辞儀をし、代金より多めの銭を取り出しておばさんに手渡した。

「とつときな」

返された。

今度は忘れない。少女は胸に秘めたその思いを、今か今かと近く茶屋にむけて念を送っていた。

さつきは忘れてごめんなさい！　今度は届けるから大丈夫。絶対大丈夫！

念を送っても茶屋の主人には届かない。致し方ない。

少女の隣には青年が歩いていった。

「医院まで来てくれたのだから、自分も茶屋まで同行するのが当たり前だ。それに……物騒だしな」

そう言って少女の護衛をしながら、一緒に茶屋まで来てくれることになった。そして案の定少女は喜んでいった。

まさかもう会えないと思っていた青年と、今はこうして隣同士で歩いているなんて……。

さてもうすぐあの茶屋か。

「て、てて……」

少女は口走る。

ててて？

青年が何事かと首を傾げる。

「て、手を……つなぎませんか？」

はて、どういうことかと青年は考えた。うーん、うーんとしては熟考した後、出した結論はこうだ。

「自分では頼りないかもしれないが、きつと守ってみせるよ」

「???」

少女は首を傾げた。

「やあ、どうも」

青年は主人を一瞥する。

「ど、どうも」

主人は少女を一瞥する。

「あの、これを渡すのを忘れてしまっ……」

そう言って小さな包みを手渡す。

主人はふむ、と一言。開けるとそれは美味しそうなお萩だった。

一口ぱくりとつまむ。

「これはこれは、また見事なもんだ」

「あなたもどうです？」

「おや、よいのですか？」

「は、はい……。食べてくれると嬉しいです……」

少女は赤面しながら言った。

そして青年もぱくりと一口。

これは美味しいと素直に感嘆する味だった。

「母によろしく言っておいてくれ」

「はい、わかりました」

少女はにつこり笑って小さくうなずく。

「あの、お母さんが待っているのです、そろそろおうちに帰りますね」
ふと青年は思った。

母君は狐のあやかしのではないか？

もしそうならなんと珍しい。少女の秘密も分かるかもしれない。

一石二鳥の結論に至った青年は言った。

「母君にお会いさせてもらえないだろうか」

少女は顔が上気するのを感じ、質問の意味を理解しようとした。え、えと、うちに来るってことは……つまりお母さんに挨拶に行きたいってこと？　もしお母さんがいいよって言ったら、この人と結婚して……云々？　ど、どうしよう……。あ、でもお萩を美味しいうって言ってた……。実はあたしも作ったんだよね。作りたてを食べてもらえるかも？　あとあと、その印にお近づきになったりして……は、ほう。

長い妄想の果てにたどり着いた結論は言うまでもない。
「是非うちにいらして下さい！」

少女の家までの道程は長い。聞いた話だと片道なんと三刻はかかるといふ。非常に長い。しかも雪山の中だといふ。

「あ、大丈夫ですよ。そこまで寒くないですから」

少女は言った。その様子を見ていた主人はちよつと待ってなど言い残して店の奥に消えた。その隙を見て青年は残っていたお萩をつまむ。

うむ、美味しい。

ふと主人が手に何かを抱えて出てきた。

「なんですか、それ」

「饞別に持つて行くといふ」

抱えていた物を広げると、それは大きな厚手の外套だった。

「これは暖かそうだ」

「そうだろう。上物だぞ？」

「しかし、いいのですか？　こんな高価なものをいただいても」

「いいんだ。どうせ使わないんだ。もらってやってくれ」

「これで雪山は大丈夫そうですね。ありがとうございます」

会話を終え、厚手の外套を恰好よく羽織り、青年は少女を見る。するとズボンのお尻のあたりがモゾモゾ動き、帽子までもがピコピ

コ動く。少女は微笑んだ。

「これからよろしくお願いします」

二人は母が待つ雪山の家に向かった。

（後書き）

毎日書きためた文章を形にしてみたものです。

この話を読んで、少しでも面白いと感じてくれたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5496q/>

解呪男と半妖狐

2011年1月31日21時40分発行